

青髭 2

明広訊

食事はどの皿もすばらしいものばかりだった。運ばれてきた料理を二人は、あたかもこれまで過ごしてきた時間を噛みしめる、というか、ある種の芸術家によって作品として再構成された現実を鑑賞するような、そんな時間を過ごしていた、とも表現できるだろう。

アンリは、壁にかかった肖像画に視線を向けた。これまでなんどもこの部屋に足を踏み入れているが、そんなものはみたことがない。きっと、その日のうちに掛けさせたのであろう。

ブーリエンヌ女伯爵は、やんごとなき身分ならば誰でも描いてもらう肖像画を、親によって強制される子供のときをのぞけば、成人してからはまったく描かせていない。幼いときに描かれた自分がとうてい自分のものと思えず、それは8歳の誕生日プレゼントだったが、「これは私ではありません」の一言で拒絶したものである。

二人の食事は、そのようなことが話題に上った。

「アンリ、あなたはどうかだったの？」

それは、水面下では互いに了承しているという、一種のサインが音声化したものだった。

思わず苦笑したアンリは、思わず料理を食む行為を途絶せざるを得なかった。自分を誤魔化すようにナプキンで口とその周囲を拭くと真顔に戻った。

「私の本当の故郷は、カルッカソムです」

今度は、女伯爵が口を拭う番だった。

「そう……」

アンリの薄い青色の瞳をじっと見入ると、おもわず視線を逸らした。今日まで彼女に仕えてきたが、このような顔をされたのは初めてだった。その固有名詞が、彼女にとってまったく知らない土地ではないかのように、青年は思った。

なんの根拠もない。既視感とも違う。確かに、彼は知っている、根拠のない結論が彼の中に無意識のうちに出来上がっていく。

女伯爵は、元来た道に戻るように言葉を編みなおした。

「あなたの身体に青い血が流れていることは、出会った瞬間にわかっていた」

「まやかしは無意味、だった、ということですね……」

女伯爵は畳み掛ける。

「夫は、あなたを殺すことを主張したの…」

「ということは、私を生かすことを主張なさったのですか？」

素直に驚きを隠さずに言った。

「あの方は王側の間諜だと思われたのですか？」

先年に戻らぬ旅に出た、夫君の顔を思い出した。とても優しげで身分らしい気品に満ちた紳士だった。

「あの時期、カルカソム伯爵家と同じような立場にあったのは我が家だった…」

「なるほど、むやみに死なせるのは、王側に宣戦布告するも同然ですね」

「しかし、あんな子供を使うとは、王もそこまで落ちたかとおもったわね」

「あの方は誤解なされたようですが、残念ながら、私は陛下の手先ではありませんよ」
鷹揚なあの方が、それほど思い切ったことを主張なさるとはそうとうの気苦労をかけたのだと、過去に向かって青年は忸怩たる思いになった。

含んだ葡萄酒の強すぎる甘味に、アンリはかすかに眉間に皺を寄せた。

「それがわかっているわ…だから助けたわけでもないのよ」

「詳しいことを申するならば、私は、代々、伯爵家の執事の職にある家に生を受けました具体的な門地は、ギョイエヌ又従子爵家ですが、その家に生まれて育ちましたが、貴族に生まれた者として、天性の才能の限界まで魔術と剣術は身に着けたつもりです。しかしながら、私は生まれつき宛がわれる運命から自由になりたかったのです。それゆえに、18歳の誕生日に家と領土から出奔しました」

なんて、下手な自己紹介だろうとアンリは内心で苦笑を抑えきれなかった。まるで子供の作文だ。それもかなり教師受けの悪い答案であることがわかる。もしも、彼が教師でも及第点はどうていあげられない。

だが、箇条書きで羅列するほどにアンリの人生は、いわば、人生の助走にすぎなかったのか、そう問われれば、明らかに「否」と答える。青年は、今日まで仕えてきた主人の苦悩する横顔を見た。彼女は、アンリの視線を真正面から受けることができずに美しい顔の半分を闇に隠している。視線は、壁にかかった、彼女の幼い時代の可愛らしい肖像画に逃げている。

「で、どうして、おのれの運命に立ち戻る気になったのかしら？」

「父が亡くなったと報告がありました。彼は、自分の後を襲うように念を送ってきました」

「カルッカソム伯と面識があるの？」

かすかだが、その固有名詞を発するとき形のいい唇が不必要に揺れたような気がした。

「我が家では、父の奉仕先のことはタブーでした。どんな方なのかまったく知りません。ただ、これから仕える先である、それだけは確かなようです」

もしかしたら、女伯爵は自分を手放したくないのではないか、アンリは、そう思う自分を思い上がりだと密かに笑った。

彼女は、遠い昔のことを思い出していた。

ふいにアンリの声が迸った。

「さて、私はそろそろ失礼せねばなりません」

青年は闇に消えていく。そういう妄想が彼女を立たせた。

「お待ちなさい…」

よくみると、しかし、アンリは席についていた。招待された席で主人よりも客が立ち上がるのは明らかに礼に失する行為だ。彼がそれを弁えていないはずがない。

女伯爵には子供がいない。それゆえに目の前の青年を養子にして後を継がせるという背選択肢はあるにはある。しかし、それが実現したとしても火元からべつの火元に招くようなものだ。自分の家とて、王家と波風が立たぬとは必ずしも言い切れぬのだ。しかし、戦場とわかっている場所へと追いやるなどということは……。

「みなと顔を改めて合わせるのは辛いのでここからお暇させていただきますよ……」

勝手に話を進めないでほしいと、女伯爵は思った。

アンリからすれば後ろ髪引かれる前に消え去りたかった。これから、どんな茨の道が待っているともそれから目を背けることはもはや許されないと考えている。モラトリウムというにはあまりにも長い年月だったが、二十代後半になって立つといってもいい頃だと思う。

自分のことを思ってくれている女伯爵には悪いが、いや、そう思う資格はアンリにはすでにないのかもしれないが、とにかく、一秒でもはやく立ち去りたかった。

ふと、視線を彼女に戻すと背を向けていた。それが合図だと思ったのか、青い血を發揮させて闇と身体を同化させて、わずかな隙間から屋敷からナルボンヌの街へと跳んだ。

ちなみにわずかな隙間とは、小間使いがドアをロックし、それに女伯爵が応えて、彼女はドアを開けてできた間隙を抜けたのである。